

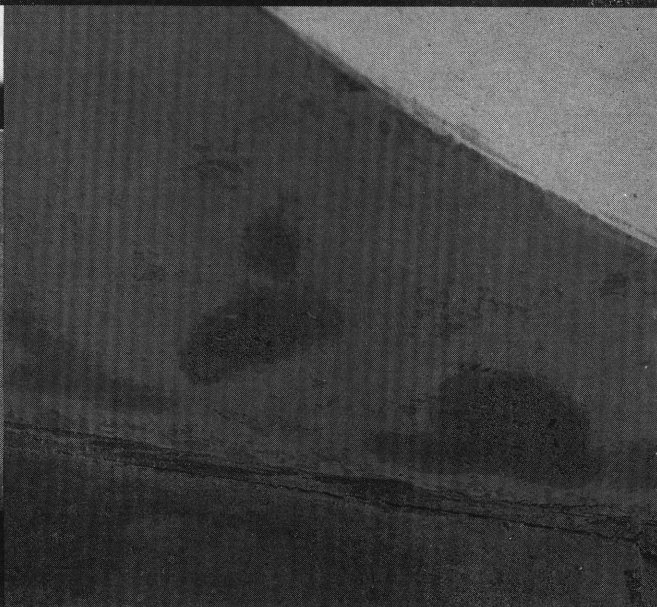
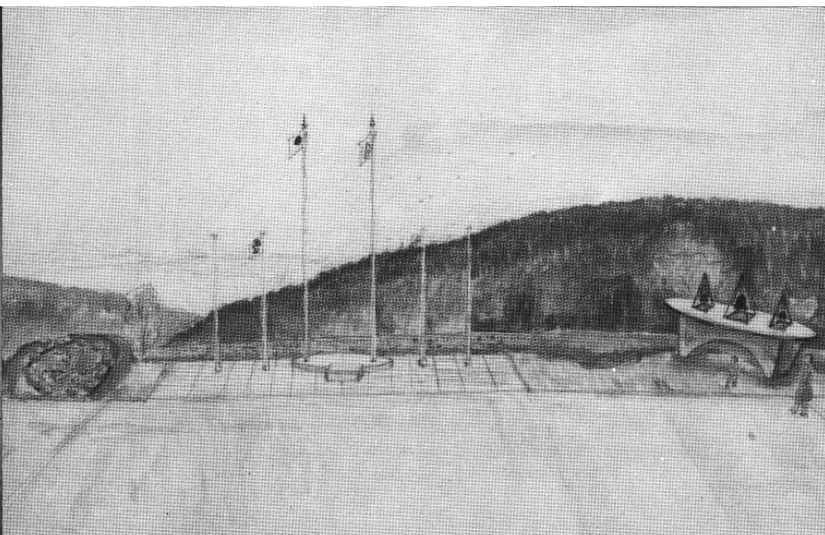
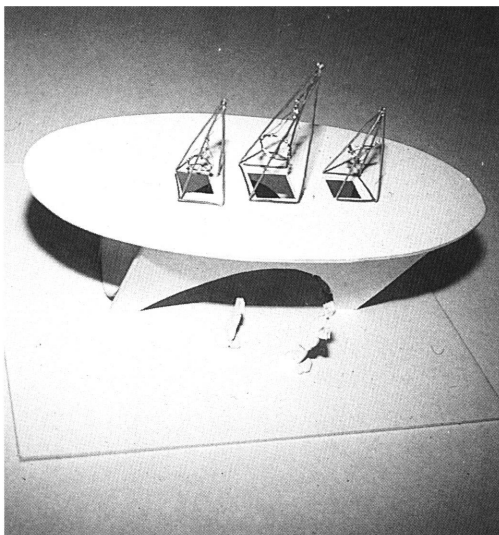
国立諫早少年自然の家  
鐘の塔モニュメント

高さ 525, 円盤長径 800, 短径 360  
(円盤までの高さ 300) cm

井川 惺 亮 1989







2	3
4	5
6	7

2. 模 型 3/100

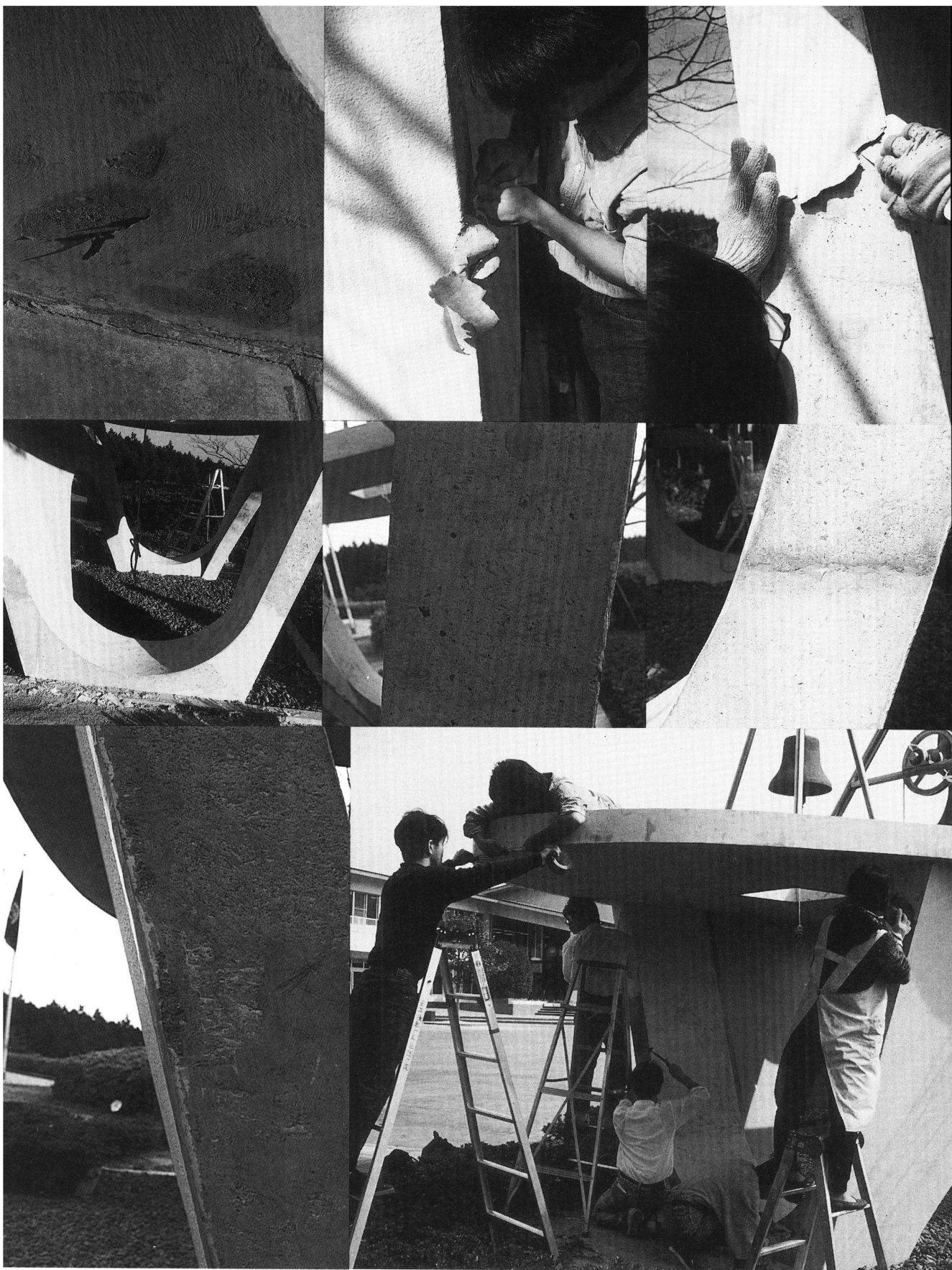
3. 予 想 図

4. 完成式 6月3日 '89

5. 研磨後の清掃 10月14日 '89

6. 研磨後の円盤(部分)

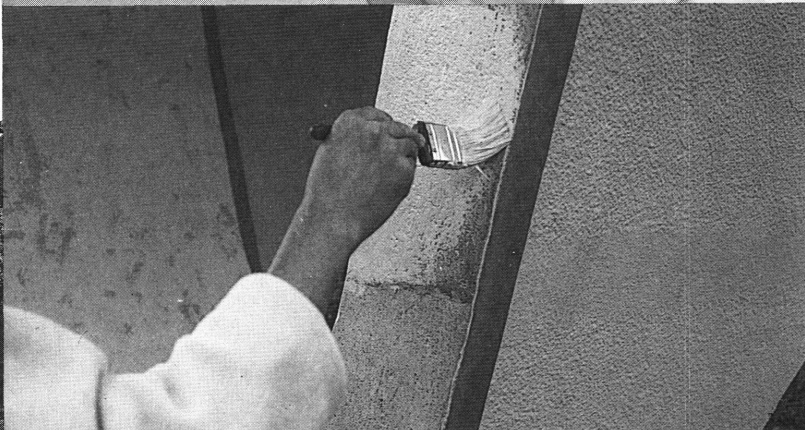
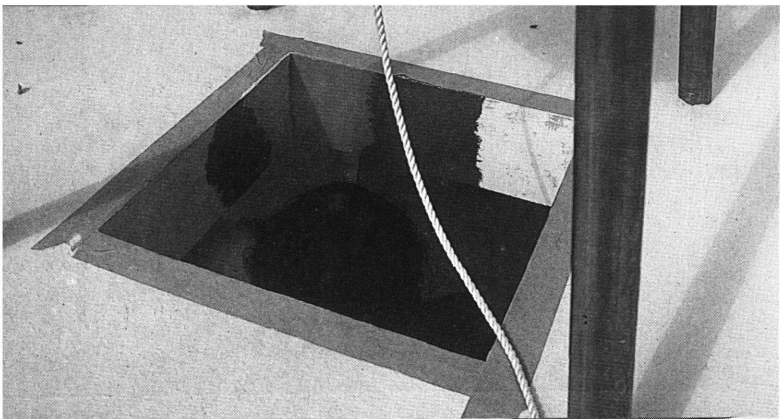
7. 研磨後のU字柱と大地との接点(部分)



8	9	10
11	12	13
14	15	

8. 一部ビニール系塗料はくらく 9. 8によりコンクリート地まではぎとり 10. 9と同様 ビニール系塗料をはぎとり  
 11. U字柱の部分 12. 10の塗装部をはぎとった後のコンクリート地肌 13. コンクリートつなぎ目が出  
 14. 12と同様 コンクリートのマチエール 15. 着彩にあたりマキシングをする





16	17	
18	19	
20		

16. 鐘の窓口着彩

17. 着彩（円盤）

18. 筒状内部着彩

19. 着彩（U字柱）

以上10月15日 '89

20. 少年自然の家広場風景

（写真1と20は藤本愛一朗氏

撮影。1月24日 '90）





## 国立諫早少年自然の家 鐘の塔のモニュメント制作

井 川 惺 亮

### 鐘の塔建設のあらまし

国立諫早少年自然の家の発行誌、「10年のあゆみ」(昭和62年発行)によると、この少年自然の家は長崎県と佐賀県を結ぶ雄大な多良山系の一つ、五家原岳の中腹(標高480m)にあり、文部省の学制百年記念事業として、全国で三番目、九州では初めての施設が開所されたとある。そして、昭和56年に所歌「国立諫早少年自然の家の歌」(栗原一登作詞、團伊玖磨作曲)制定となっている。

この歌の3節目の初めに『鐘よひびけよ 諫早に』と歌われている。このことを理由として、諫早少年自然の家「鐘の塔」建設発起人会が昨年発足した。その趣意書には、鐘の塔を望む声が急速に高まっていることや、この鐘の塔が21世紀を担う少年の鍛錬の場である諫早少年自然の家のシンボルとして、また、朝・夕のつどいに鐘を鳴らし少年に夢と希望を与え、鐘の響きのごとく永遠の平和を願う心を涵養するもの等々と書かれている。そして、発起人会は諫早少年自然の家の10周年記念事業の一環として、この鐘の塔を少年自然の家に寄贈するものというものである。

### 鐘の塔のモニュメントの依頼及びその内容について

昨年2月、韓・日大学交流展を終えて帰国した頃、諫早少年自然の家の前庶務課長志田氏が来校され、前学長保田先生、本学部前事務長片瀧氏を通して、私のところに志田氏は来室された。私としては願ってもない仕事内容だったので快く引き受けることにした。

志田氏は、鐘の塔のモニュメント制作の条件として次の3つを挙げた。①子どもと自然とのふれ合いで、少年施設にふさわしく、夢と希望を与えるようなモニュメントと広場となること。②それが、少年自然の家のシンボルとなるよう、また、つどい(規律正しい生活)の合図として、子供の手で鐘を鳴らすことが出来ること。③高さは10mぐらいなもの。

### 鐘の塔の形体、全体像は絵画性のあるモニュメントに

デザイン条件についての③は、私なりの構想を根本的に考えてみる必然があり、そのことを志田氏に話したところ、高さについては、10m以内で、①と②を満たすような鐘の塔のデザインをということになり、私はまず、設置される周辺を歩きその現場スケッチから始めた。鐘の塔の形体はどんなものいいか、約2ヶ月間程練ってみた。

現場では、建物から広場に出ると、左方に円形の花時計の花壇(巾7.2m)、中央に国旗掲揚のポールが楕円形台上に2本、その下の左右に2本(高さ7m)、計4本が並び、右側のコーナーに例の鐘の塔が設置されることになっている。これら周辺全体を考えながら、それらを取りまく山の形、特に向いの山の陵線、近くの桜の木等もからみ、条件①・



②を最大限に見るなら、塔の高さは、人の目の高さと同スケールにより、次のような模型（写真2）が出来上がった。（註1）

塔の高さは通常の場合、イメージ的には高いところから鳴る鐘の音を聞くことから、出来るだけ高いものとして考えるのが普通であろう。ところが、この出来るだけ高いという垂直性については、国旗掲揚のポールが4本も垂直に並んでいるため、むしろ、このポールに垂直性をゆだねることにして、それに対して、鐘の塔は水平横長のデザインを基本にして、水平横長は諫早のまちの方に向けた。この塔の柱となる筒状の台の上に、丁度、鐘がUFOのように宇宙的な円盤に乗って、それも一つの鐘でなく、自由・平和・愛という3つの鐘を並べてみた。（註2）これら3つの鐘の音は、この筒状を通してラッパのように諫早のまちにこだまするようにイメージ化した。

ある方が出来上がった鐘の塔の高さを見て、丁度、お寺の鐘のような高さで、きっと子どもたちにとって鐘が身近かな存在として、親しみが湧くのではないのでしょうかといわれた時、なるほど、お寺の鐘、手で届きそうで届かない高さをこの鐘の塔と私は思わず、だぶらせた。

この塔の筒状を支える柱巾や円盤状の厚みの巾は、私自身の絵画の解体、脱構築というテーマで、キャンパス上で考察してきた着彩された木枠からヒントにしたものである。そして、鐘の塔として単なるデザイン化した色でなく、色による絵画性のあるモニュメントに、つまり、立体作品（建築的・彫刻的な作品）であるにもかかわらず、なおも、絵画作品の領域にとどめ、より絵画的な空間を増幅させ、それによって、子どもに自然とふれ合う喜びとして楽しい空間となるようにした。

今回着彩するところは、筒状柱部（U字柱側面）、筒状内側の一部及び鐘の窓口、そして、円盤状の厚み巾のところである。（註3）

### 鐘の塔の着彩をめぐる

発起人会では、まず、鐘の音色を決定し、それに伴って鐘の厚みや大きさが形づけられた。11月に鐘の塔の完成の予定であったが、諸般の理由で6月3日竣工式祝賀会に向けて、4月中旬より工事が着工され、急ピッチで進められた。

5月下旬になって、塔の下に床に水はけとして玉じゃりを敷く案が出され、この日本的なイメージとして思わぬ副産物を私は受けとめることにした。鐘の塔工事の最終段階で、今度はコンクリートを白色で吹きつけ塗装をする案が持ち出された。私としては、コンクリート打ち放しは多分に、絵画的な要素を含んでおり、また、その方が鐘の塔のモニュメントとして自然と溶け込むイメージとなり、その上、着彩に関して今までの苛酷な条件、すなわち、戸外での紫外線をもろに受けたり、雨ざらしになったりした外壁画制作（註4）の経験から見て、どうしてもコンクリートの素肌を活用したいと思っていた。何よりも、絵の具が外界から守られる条件としてそれは必要なのだ。が、再三の工事担当者の申し出に、それなら透明なもので塗ることになったが、それも実際にはなく、コンクリート地に近い色を選んで欲しいといわれた。その際、着彩する部分だけをコンクリートにマキシングする方法を提案したが、業者は吹きつけ塗装後の着彩に必要な部分のコンクリートの研磨は容易であることを私たちに伝えた。私はかなり渋りながらも妥協せざるを得なかった。何れ、竣工式以降、夏休みに入ったら、着彩する部分を研磨してもらい、着彩することの



約束をとった。

ところが、いざ着彩を行いたいと8月初旬の申し出に対して、その下旬になって、発起人会から鐘の塔は6月3日で完成し、全て完了（写真4）したと伝えられた。（註5）幸い、少年自然の家所長谷口氏の尽力により、発起人会との連絡を密にとって下さり、やっと、10月14日、15日に着彩することの実現の日が確約された。

### 鐘の塔のモニュメントの着彩プロセスについて

着彩にあたり、予め、着彩する箇所を、工事担当者にコンクリート地までの研磨を頼んだ。ところが、研磨に対する認識のズレがあった。吹きつけ塗装部の凹凸にただ単に平にただけで、コンクリート地までの研磨は行ってなく、すなわち吹きつけ塗装の下地、中塗、上塗の各々の黒、灰、白色とが、技術的に平になった上に<sup>まだら</sup>班模様となって表出され、（写真5・6・7）、正直いって視覚的に見苦しく、着彩する気になれなかった。更に、写真8・9・10のように、これらの研磨部のあるところは、コンクリート地から塗装部がめくれていたり少しはぎとるものなら、バガーと落ちる箇所もあった。念のため、工事関係者に電話で問い直してみると、この研磨が精一杯で、もし、コンクリート地まで完全にやるとしたら、10日間はかかる。それもダイヤモンド研磨機が必要なので、もう、カンベンしてくれという。以上のことを谷口所長に報告し、班模様を了承の上で、着彩することになった。

まず、筒状のU字の柱の巾の部分（写真9・10）は、全面コンクリート地まで吹きつけ塗装をはがして約一日かかりで私の研究室のゼミ生と行った。そのうちのひとりが、私たち素人で一日かかりですから、プロがやればこんなものすぐ出来たはずと手に出来たマメを見ながら、半ばあきれ顔でいっていた。（写真11）。写真13は、コンクリートのつなぎ目が出てきたところで、逆にいえば、つなぎ目に吹きつけ塗装すれば完全につなぎ目が見えなくなったわけである。写真14・15は直接着彩する場合、勢い余って筆が走らないように、マスキングをしている光景である。こうすれば思い切って着彩が出来ると同時に、色彩の制御にもつながる。写真16以降次第に着彩の完成へと進む。（註6）（註7）

鐘の塔のモニュメントの着彩を完了したことで、私が意図した鐘の塔のモニュメントのイメージが私の中ではほぼ定着したことになるが、私にとって、その喜びよりも、むしろ、少年たちが大自然のもとで、このモニュメントとの出会いによって、彼らが鐘の音と共にどんなイメージを発するかが楽しみである。

註1 鐘の塔のモニュメント設計図製作については環境計画研究室代表石井千明氏にお願いした。

註2 この諫早少年自然の家のシンボルマークが山という字をあしらったデザインであることから、私の3つの鐘の塔を並べると、このデザインとピッタリと重ね合わせることができる。

註3 今回使用した絵の具はアクリリック ポリマー エマルジョンである。

註4 私がこれまでに行った外壁面及びモニュメントは長与町ペーロン資料館他計9つ。

註5 朝日新聞、8月27日付、鐘の塔をめぐる対立を参照。

註6 私の研究室の絵画ゼミ生（波多野、松野、嶋橋、伊藤、矢野、兵庫、小原）の協力を得た。朝日新聞、10月17日付、色付け完成を参照。

註7 鐘の塔モニュメントの着彩後の着彩のためのコーティングは11月26日に行った。